宮城教育大学附属図書館　児童図書リーフレット

カムパネルラ

～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.1　　2007 年 11 月号

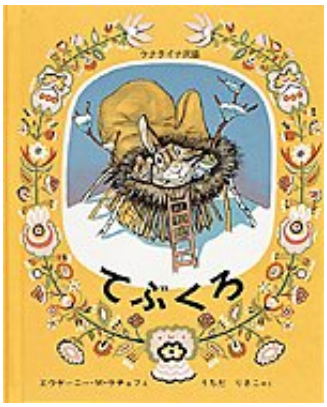
■ 絵本の力　　ーカムパネルラと旅に出るにあたってー・・・・藤田　博
■ 児童文学の読者は誰か・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・中地　文
■ 幼稚園児に人気の本・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・坂内　玲子
■ 授業の場で活用している絵本について・・・・・・・・・・・・・成瀬　聡
■ 心に残るこの一冊・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・佐竹　優
■ 新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・藤田　博

■　絵本の力　　ーカムパネルラと旅に出るにあたってー

藤田　　博

絵本（を含む児童図書）には力があります。常識を打ち破る力です。それはどこから出てくるのでしょうか。子どもを対象とするものだから、というのがその答えに思われます。子どもは常識にとらわれないものの見方ができます。その力を持った子どもを意識し、対象とする、だからこその力と言えるのです。

絵本の世界にあってあべこべ、ひっくり返しは当たり前、それこそが絵本の世界の常識です。小さなものが大きなものを飲み込むあり得ないことも、絵本の中でなら当たり前。驚く心に見合うものです。ワーズワスの詩の一節、“The Child is father of the Man.”のパラドクスは、驚く子どもの心をなくしたくない、それでいて常識にとらわれてしまった大人を歌ったものに他なりません。



エウゲーニー・M・ラチョフ『てぶくろ』は、そうした大人の常識に挑戦する絵本の代表です。雪の中に落ちている手袋の中にねずみが入り、かえるが入ります。更にうさぎが入り、きつねが入り、おおかみが入り、いのししが入る。最後に大きなくまが駄目押し的にやってくるのです。入らないと言いながら入ってしまうのが不思議なところ。そうした手袋があってもいいではないかとそのまま認める、子どもの発想によります。

大学という場にあって絵本は縁遠いものと思われています。大学は大人の世界と考えられているからです。その大人の世界を挑発する目的で授業の中で絵本はどう使われているのでしょうか。あの先生があの授業で、ならば自分もこの授業でということがあってもいい。つなぐ力、それが絵本のもう一つの力だからです。

附属校園にあって絵本は最も近いところのもの。その附属校園と絵本を介してつながりをつくり出すことができればとの思いがあります。学生諸君にも手に取って欲しい、そのために図書館に足を運んで欲しい。それをきっかけに奥の方の本にも手を延ばして欲しいと思います。つなぐ力を持った絵本につなぎの役を期待する所以です。

タイトルは「カムパネルラ」としました。宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。隔月という短い間隔での発行によって、大きな広がりを持つ絵本の世界を伝えていきます。

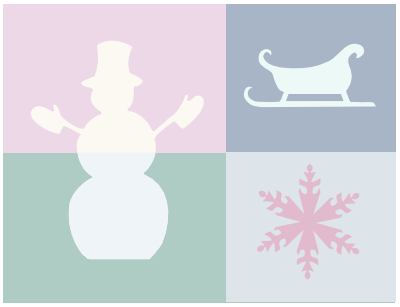
※「てぶくろ」ウクライナミ民話／エウゲーニー・M・ラチョフ絵／内田莉莎子訳／福音館書店

（英語教育講座・図書館運営委員会委員）

■　児童文学の読者は誰か

中地　文

日本において児童文学はいつ誕生したのか。この問題に関しては諸説があるが、児童文学というジャンルを明確に意識して創作・出版活動が展開され始めたのは近代に入ってからとする見方が一般的であろう。実際、1891（明治 24）年に少年文学叢書の第一編として巌谷小波（いわや・さざなみ）『こがね丸』（博文館）が刊行されたとき、児童文学の創作は新しい試みであると認識されていた。同書の「凡例」には、少年文学とは少年用文学という意味で、日本にはそれを表す適当な言葉がないので仮に名付けたとの説明が記され、さらに「斯（かか）る種の物語現代の文学界には、先（ま）ず稀有（けう）のものなるべく、威張（いばり）て云へば一の新現象なり」と記されている。

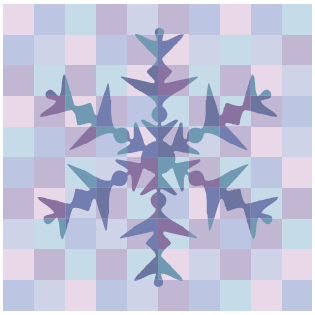


ところで、この「凡例」は、用語・表現からみて大人に向けて書かれたと考えられるが、対象とされた大人は子どもに物語を手渡す媒介者（ばいかいしゃ）だけではなく、文学を好んで読む読者も含まれていたのではないだろうか。「現代の文学界」の「新現象」という主張には、児童文学も文学の一ジャンルとして注目して欲しいという思いが込められていると見受けられる。そうしてみると日本の児童文学は、その揺籃期（ようらんき）において、読者を子どもに限らないもの、大人にも読んでもらいたいものとして創作されていたということになるだろう。

その後、日本の児童文学界には大人の読者がさらに強く意識される時期が訪れる。「赤い蝋燭（ろうそく）と人魚」等の作品で知られる小川未明（おがわ・みめい）は、1926（大正 15）年 5 月に「東京日日新聞」に発表した「今後を童話作家に」で、自分の「童話」は「芸術」であり、「大人に読んでもらつた方が却（かえ）つて、意の存するところが分る」と述べている。しかし、このような未明の童話観は、戦後、現代児童文学の方向を模索する人々によって批判された。未明は子どものための文学を子どものために書かないという逆説を演じた（『子どもと文学』1960 年 4 月、中央公論社）と評されたのである。現代児童文学は、こうした「童話伝統批判」を経て成立した。

しかし、ここで気になることがある。現代児童文学は、佐藤さとる『だれも知らない小さな国』（1959 年 8 月、講談社）、いぬいとみこ『木かげの家の小人たち』（1959 年 12 月、中央公論社）が刊行された 1959（昭和 34）年に成立したとする説が現在定説となっているが、佐藤さとるは、「“子供のために”なんて考えたことがない」（『ファンタジーの世界』1978 年 8 月、講談社）と、作家としての出発期から現在まで一貫して主張しているのである。現代児童文学を担う作家の一人である佐藤のこの発言は、いったい何を意味しているのか。

佐藤さとるの上記の発言は、「文学とは、あるいは芸術とは、本来そういうもの」という主張とつながっている。思えば、巌谷小波の場合も、小川未明の場合も、大人読者への意識は児童文学は文学の一ジャンルであるとする考えと結びついていた。児童文学が文学・芸術であるためには、子どもだけに受け入れられれば十分とするわけにはいかないのである。このことは、我々が優れた児童文学作品を探すときの手がかりとなるのではないだろうか。



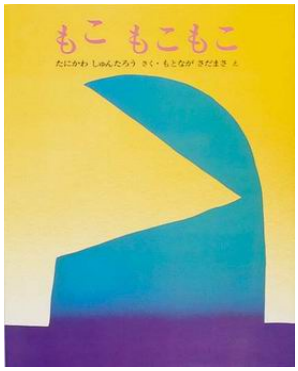
良い児童文学とは何かと聞かれることがある。その答えは読者として真剣に児童文学と向き合うことによって得られるのではないか。作家の言葉はそれを伝えているように思われる。

（国語教育講座）

■　幼稚園児に人気の本

附属幼稚園の３歳児に人気のある本を紹介します。

坂内　玲子



『もこ　もこもこ』　たにかわしゅんたろう　さく・もとながさだまさ　え

幼稚園にあるこの絵本は，ぼろぼろです。それは，子供たちが読んでもらっては喜び，自分で絵を見ては喜ぶ，とっても素敵な本だからです。「にょき」「もこ」「もぐ」「ぱく」「ぷー」こんな言葉だけでできている絵本ですが，子供たちは，言葉と絵から想像したことを，実に楽しそうに話してくれます。子供の心をぐっとつかむ絵本なのです。

『せんろはつづく』　竹下文子　文　　鈴木まもる　絵

３歳児は，電車ごっこをするのが大好きです。保育室にある積み木や椅子は，子供たちによって電車の座席に大変身します。電車ができると子供たちは，さっそく乗客になったり、運転手になったりして遊び始めます。子供たちがこの本に惹かれるのは，自分が絵本の中に入ってしまっているからではないでしょうか。絵本の中の子供たちが，自分たちの手で線路をどんどん延ばしていき，駅まで作るのですから，楽しくないはずがありません。ページをめくるたびに，「次はどこに線路が続いていくのかな。」と子供たちは，期待に胸をふくらませるのです。

※「もこ　もこもこ」谷川俊太郎作／元永定正絵／文研出版

※「せんろはつづく」竹下文子文／鈴木まもる絵／金の星社

（附属幼稚園副園長）

■　授業の場で活用している絵本について

成瀬　　聡

今年の５月下旬から６月初旬にかけて，物語文の読み取りの授業を行った。扱った教材は宮西達也氏の「ニャーゴ」（東京書籍　２年国語上）。「ニャーゴ」の指導を通して，文章中の言葉をもとに，想像を広げながら読み取っていく力を付けるとともに，一層読書活動に親しませていきたいと考え単元を構成した。単元の大まかな計画は以下の通り。

(1)登場人物の様子や気持ちを話の順序に気を付けながら読み取っていく。

(2)宮西達也の他の作品や関連する内容の作品（他の作者）を読み，感想を発表し合う。

「ニャーゴ」の読み取りを終えた後，宮西達也氏の『おまえうまそうだな』を読み聞かせ，その感想を交流させた。読み聞かせでは，みんな絵本を食い入るように見つめ，二人の心の交流や解釈のずれ（勘違い）の楽しさを味わいながら話に聞き入っていた。読後の感想では「おもしろかった」「さいごはちょっとかわいそうだった」など，活発に意見の交流が行われた。読書意欲が高まってきている中で，他の作品や関連する内容の作品を紹介したところ，ますます読書に対する意欲の高まりが感じられた。紹介した本は『おれはティラノサウルスだ』『あなたをずっとずっとあいしてる』『おとうさんはウルトラマン』そして『びっくりたまご』『かんちがい』などである。

昼休み後の読書タイムでは，夢中になって読書をしている児童たちの姿が今日も見られた。

※「おまえうまそうだな」宮西達也作・絵／ポプラ社

（附属小学校教諭）

■　心に残るこの一冊

『しろくまちゃんのほっとけーき』（こぐま社）

佐竹　　優

「おいしいね。」母のその一言で、ホットケーキは私の得意とするおやつになった。得意とは言いながら、卵を落としたり、ボールの中身をこぼしたり、しろくまちゃんと少しも変わらない。大きなホットケーキを焼こうとして、厚くなりすぎてしまったこともある。

便利な調理器具が溢れ、ホットケーキほどに単純で地味なおやつはなくなった。そうした中だからこそ、『しろくまちゃんのほっとけーき』は、簡単なものほど手をかけて作るあたたかさを思い出させてくれる。フライパンが１２個並ぶページは、私のお気に入りである。「やけたかな。」「まあだまだ。」はやる気持ちを抑えながら、行ったり来たりする。ようやく完成したホットケーキをおかあさんとテーブルへと運び、こぐまちゃんを呼ぶ。友達と一緒に分けて食べる喜び。おいしさを思い出しながらの後片付けに苦労などないのである。

誰かのために作る喜びは、昔も今も変わらない。私がホットケーキを作ることはほとんどなくなってしまったが、何を作ろうと調理後の台所は目もあてられない。それでも次こそはと腕まくりができるのは、見た目よりも味よりも、一緒に食べる家族や友達の笑顔があるからと思っている。

※「しろくまちゃんのほっとけーき」わかやま けん作／こぐま社

（英語教育専攻４年）

■　新刊紹介

松浦寿輝『川の光』（中央公論新社）

『平面論』、『知の庭園』、『物質と記憶』、『表象と倒錯』、手元にある松浦寿輝の本のいくつかを並べたものです。作家にして詩人、批評家、東大教授、その手になるものはいずれも超が付くほどに難解です。難解をもってなる松浦寿輝がこれをという驚き、と同時に、だからという納得、双方の思いがあります。しかし、そうしたことはどうでもいい、タータとチッチのクマネズミの兄弟、それにお父さんの物語を楽しめばいいのです。暗渠化を目的とした工事のため、川岸のすみかを追われた親子が上流へと向かう冒険物語です。とすれば、敵役がいて味方がいてはお決まりのもの。あぶないところで助けが現れる、はらはらどきどき感を味わえばいいということです。

ゆるやかに、うねうねと、光りながら流れつづける川は生命そのものです。身近であったその川がいま遠いものになってしまっています。直線化され、コンクリートによって両岸を固められる。ここでの川のように暗渠化され、見えなくなった川も数多くあります。小さなもの、弱いものへのまなざしを欠いたものとなっているのです。

斎藤惇夫『ガンバとカワウソの冒険』と読み比べてみることもお勧めです。移動する距離の差がつくり出すスケールの違いはあっても、心が熱くなることでは一つです。頑張れよと声をかけたくなるのも一つです。頑張れよのその一声は、川に対する思いを残している、川の流れの大切さを忘れていないということに違いありません。

※「川の光」松浦寿輝著／中央公論新社

（藤田　　博）

発行：宮城教育大学附属図書館